

論文審査の結果の要旨

論文提出者：辻河典子

本論文は、第一次世界大戦末期にハンガリーで勃発したいわゆる「十月革命」で短期間成立したカーロイ政権に関わった政治家たちが、政権崩壊後亡命先で行った政治活動に焦点を当て、主に 1920 年代前半を対象に、首相を務めたカーロイ・ミハーイと、亡命後カーロイに積極的に協力したヤーシ・オスカルという二名の人物を軸として、彼らのパリ講和会議体制修正のために展開した様々な活動を実証的に明らかにしたものである。

本論文の構成は、序章と終章の他、本論として 8 つの章があり、本論部分は大きく 3 つに分けられる。

序章では、1919 年以降ハンガリー国外に亡命した、カーロイを中心とする「十月革命」派の政治家たちを「亡命者」と定義づけた後、本論文で扱う問題に関する先行研究を詳述し、それを踏まえて本論文の視座と目的を提示する。

本論の第一部を成す第 1 章と第 2 章は、「亡命者」集団の形成とその活動の背景として、第一次世界大戦期から 1920 年代半ばにかけてのハンガリーの政治状況を概観する。第 1 章「1918-19 年革命」は、1918 年の「十月革命」前夜から 1919 年の「評議会革命」政権の崩壊までの時期を扱い、「十月革命」前夜の政治状況とその時期におけるカーロイとヤーシの政治活動、「十月革命」により成立したカーロイ政権の政策、そしてこの時期ハンガリーの歴史的領土の解体が事実上不可避となる中で生じた混乱による政権移譲とその後の「評議会革命」の成立などの諸点を明らかにする。第 2 章「戦間期ハンガリーの政治体制の確立」は、「評議会革命」政権の退陣後、一般に権威主義体制と見なされる、ホルティを摂政とする政治体制が確立する過程を、当時の国内政治状況および第一次世界大戦の講和条約であるトリアノン条約の締結過程と関連付けながら検証する。

第二部を成す第 3 章から第 5 章までは、1919 年秋から 1921 年夏までの時期を対象に、「十月革命」に関わった政治家たちがウィーンを中心として亡命政治組織の形成を試みる過程が示される。第 3 章「「亡命者」組織の構想」は、亡命後、政党などの組織に属していなかったカーロイやヤーシらが、亡命中のその支持者たちを組織化する試みを論じ、その中で彼らの間にあった理念や路線の相違を明らかにする。第 4 章『ウィーン・ハンガリー新聞』は、「亡命者」の活動にとって宣伝媒体として重要な位置を占めた『ウィーン・ハンガリー新聞』に焦点を当て、ハンガリー国外のハンガリー語話者の間で購読されていた同新聞の編集部から共産主義者や親共産主義者が排除され、それに代わってヤーシらが編集の主導権を握る過程を跡付ける。そして第 5 章「「ペーチ＝バラニャ」問題と「亡命者」」は、1920 年のトリアノン条約によりハンガリーへの帰属が定められた、ユーゴ軍占領下のペーチ周辺地域において、ハンガリー返還に反対する左派政治家が独自の政治機関を形成

したことに「亡命者」たちが注目し、彼らがペーチの勢力との連携を模索する一連の動きを検証する。

第三部となる第6章から第8章までは、パリ講和条約後の秩序が徐々に定着し、ホルティ政権およびオーストリア＝ハンガリー帝国解体後の中央ヨーロッパの秩序が固まってゆく中で、「亡命者」たちが行った列強への宣伝活動の実例を具体的に取り上げ、そしてこうした努力にもかかわらず、最終的に彼らの活動が終焉を迎える過程を検討する。第6章「「亡命者」としての列強への働きかけ」は、ホルティ政権が国際的な承認を受ける中、「亡命者」たちが列国議会同盟第20回本会議において、ハンガリー政府を批判する小冊子の配布を試みた事件を取り上げ、冊子の内容と事件の影響を考察する。第7章「列強への対外宣伝活動」は、列強への宣伝活動のもう一つの例として、ハンガリー本国で国家反逆者として訴追されたカーロイの事件に焦点を当て、ハンガリー問題への介入を期待しつつ、この訴追の不当性を広く列強に訴えるためにカーロイや他の「亡命者」たちが行った「大使会議」への訴えやカーロイの回顧録の執筆、そして彼のイギリス、フランス、アメリカでの様々な活動を詳細に検討する。そして本論最後の第8章「「亡命者」の活動の変容」は、『ウィーン・ハンガリー新聞』の財政難による廃刊と、共和主義者と労働者からなる「ハンガリー人権連盟」の創設という新たな展開の中で、「亡命者」の間で路線の相違・対立が明らかとなり、最終的に彼らのまとまった活動に終止符が打たれる過程を分析する。

こうした本論での議論を受けて、終章では「亡命者」たちの活動の特徴と限界をあらためて考察し、本論文の学術的な意義を提示する。

本論文の考察対象であるカーロイ、ヤーシらに関しては、従来「十月革命」との関わりで研究がなされ、特に歴史的ハンガリーの領土解体がカーロイ政権期に決定的となったことから、カーロイの評価をめぐる現在まで論争が続くなど、ハンガリー史における重要な問題の一つとなっているが、彼らの亡命後の活動に関してはこれまであまり注目されず、研究も十分に行われていなかった。本論文はこの部分に光を当て、カーロイの書簡集とヤーシの日記、そして彼らの政治活動において重要な役割を果たした『ウィーン・ハンガリー新聞』などの膨大な刊行史料を丹念に分析して、カーロイとヤーシを中心とする亡命政治集団、すなわち「亡命者」の政治活動を詳細に跡付けた。この点が本論文の持つ最大の学術的意義であり、審査委員からも実証的で丁寧な仕事であるとの高い評価が与えられた。また本論文が、「亡命者」の活動の背後にある政治思想にも注目し、権威主義体制下のハンガリーのみならず、広くヨーロッパでの近代市民社会の実現とそれに基づくパリ講和体制の修正を目指す彼らの政治的立場を「民主主義的な講和条約修正主義」と指摘して、政治活動と思想的背景を有機的に結び付けて議論を展開している点、さらに、オーストリア＝ハンガリー帝国解体後に成立したハンガリー周辺諸国やパリ講和体制を主導するイギリスやフランスと「亡命者」たちとの関わりを具体的に明らかにしたことにより、彼らの一連の活動をハンガリー一國史のみならず、中央ヨーロッパ史、さらにはヨーロッパ史全体の

文脈の中に位置づける視座を本論文が有している点についても、重要な学術的貢献と見なし得る。

その一方で、審査委員からはいくつかの問題点も指摘された。例えば、①叙述に重複が多く文意が明確でない部分が散見されること、②終章に本論文の限界が記述されておらず、論文提出者自身がこの論文を踏まえて今後どのように研究を進展させてゆくのか、今後の展望が十分に提示されていないこと、③また史料の扱いに関して、本論文が膨大な史料に基づいているとはいえ、依拠した一次史料の多くがカーロイとヤーシ自身の記述であるため、当事者ではない第三者による一次史料によってこれらを裏付ける作業が必要であること、④「亡命者」たちが批判し変革の対象としたホルティ体制に関して、「亡命者」たちの見方や関わりも含めて説明が不十分であること、などである。

しかしながら、これらの指摘は決して本論文の学術的価値を否定するものではなく、それらは今後の研究の発展の中で論文提出者が克服してゆくものと考えられる。またこうした問題点の指摘に対し、論文提出者はそれらを真摯に受け止めつつ現時点での考えや展望を述べ、その回答は審査委員を十分納得させるものであった。

以上のことから審査委員は全員一致で、本論文が博士論文として十分な水準に達しているものと判断した。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。